総合討論

司会（伊東）　通常ですと、ここで司会者が報告者のお話しを要約したりまとめの質問をしたりいたしますが、時間もあまり残されておりません。フロアーの中には、こういうことを聞きたいとか、話のなかで分からないところがあったとか、という思いを抱かれている方がおいでになると思います。まずはそれをここで出していただき、それに対して報告者が回答することからはじめ、本日のテーマについてご議論いただければと思います。

鈴木[1]　藤本先生が最後のところで、「学者も僧侶も関心がある一般人も、遠慮なく関わるべき。得るものは必ずある」述べられました。こういった修行の場というものは、身近にあるのでしょうか。

藤本　南伝上座仏教の修行会は、たとえば日本テーラワーダ仏教協会では、いつも行っております。うちの寺でも上座仏教のお坊様をお招きし、またこれを学んだ私たちだけででも、常時やっています。他にも探せばけっこうあると思います。ただ、上座仏教系といってもいろいろあります。ものによって良し悪しはあり得ますので、まず、お説教でも聞いて、質問して、教えややり方に納得できるかどうかチェックしてみる方がよいかもしれません。インターネットでも出て

くるほど、今はいろいろあります。

これで調べてみると、「名古屋のどこそこ会館で日帰り瞑想会をやっています」などという情報がけっこうあります。いきなり「さあ、うちの会に入信しなさい」ということは、おそらく上座仏教系ではないはずですので、取りあえず行ってみたらいいかと思います。世間の講習会みたいな感じでやっています。

下野[2]　日本仏教が異質な発展を遂げてきた理由の一つに、比丘サンガがないことを、藤本先生は指摘しておいでしたが、同時に檀家制度によって生活が維持されてきたということも理由であろうかと思います。つまり、修行をしないでも食べていけるという制度ができあがったといえます。その檀家制度が、個々の寺や宗派を維持してきたということもあるかと思います。とても下世話で失礼なことを伺いますが、先生のところのお寺はどのようなかたちになっているのでしょうか。

藤本　「単立」寺院になってどうかということですね。これは制度の問題ですが、宗派に属していても「単立」でも宗教法人としては今までどおり続けることができます。宗教法人が、法務局に出す書類の言葉を「浄土真宗(西)本願寺派との、包括−被包括(本山と末寺の)関係をやめました」と、ちょっと変えるだけで、存続は可能です。

浄土真宗(西)本願寺派の僧籍は削除されました。ですから、どこかのサイトで「お坊さんを派遣しますよ」というときに、もし私が行って「西本願寺の僧侶」とか「浄土真宗(西)本願寺派の僧

侶」などと名乗ったら嘘になってしまいます。元は西本願寺の坊さんでしたが、今は西本願寺の資格を持っていませんということになります。

それで良いのか悪いのか、無免許ではないのかといえば、宗教活動には免許の問題はありません。本物と言ったら変ですが、宗派の免許証を持っているか、持っていないかとは別に、「あの人にお布施します」だけで宗教行為は成り立ちます。個人にお布施しても、寺にお布施しても―個人として布施を受けた分は給与になって税金を引かれてしまいますが―宗教行為はちゃんと成り立っています。功徳もまったく同じく生じます。「単立」でもどこかの宗派の末寺でも、お寺というか宗教法人にお布施する分は、丸ごとお布施です。

他の宗派の「単立」寺院の住職は、所属寺が「単立」寺院だからといってその宗派の僧籍を削除されたりすることはあまりないそうです。曹洞宗などは、「単立の曹洞宗系です」という寺が結構あります。ちゃんと本山に行って宗派の僧籍を得て坊さんになって、また「単立」の自分の寺に戻っています。真宗の西本願寺だけ厳しいようです。寺が宗派を出ていくとその責任者たる住職も一緒に「お前はもうクビだ」ということになってしまいます。

山田[3] 最近、政府というか、行政の側から、道徳教育ということを言い出しております。私は、宗教実践的教育をしない限り、道徳・人間の心を育てる教育は無理ではないかという気がします。しかし、現実的には、そのようなことはやろうともしないし、できないようにも思えるのですが、そういうことについて、大学の先生方はどのようなお考えをお持ちでしょうか。

藤本　アルボムッレ・スマナサーラ長老からお聞きしたことがあるのですが、聞き違いがあるかもしれませんが、「何が善か何が悪かをきちんと理解している仏教でないと道徳を完璧に教えるのは無理ではないか」と思います。いろいろな宗教も、宗教以外でも道徳みたいなことをいろいろ工夫するのですが、理屈が通るか、通らないかが問題です。理屈が通るように組み立てられている題材でないと、子どもたちが聞いても納得しません。

私が考えているのは、ブッダの前生譚『ジャータカ』の物語を道徳の題材にすることです。『イソップ物語』でもいいのですが、『イソップ物語』も『ジャータカ』からかなり題材を取ってきていると思います。『ジャータカ』はいかにも面白おかしくつくられたお話ですが、よく調べてみると、善悪にそれぞれ楽苦の結果がきちんと出てきたり、欲や怒りに打ち勝って慈悲の心で動いて難局を解決したり、理屈が通っています。あのようなものを子どものうちから読んでいるとよいと思います。道徳でなくても、絵本みたいに子供が読むにも『ジャータカ』がピッタリだと思います。しかも、失礼ながら手前みそですが、釈尊の時代のパーリ語の『ジャータカ』が五百何個あるのですが、それがいいような気がします。

後にパーリ語の『ジャータカ』を真似てサンスクリット語の『ジャータカ』もつくられましたが、これは後の大乗仏教でつくったようで、そういうものは、ときどき変なものがあります。たとえば「捨身飼虎（しゃしんしこ）」です。修行者がせっかくの修行を中断して自分の体を捨ててトラに食わせる、というのでは意味がありません。せっかく修行をして、悟れる可能性があるの

に、トラにわざわざ自分の身を投げ出して食べられて何になるのだと。

そうではなく「真理を学ぶためなら死んでもいいよ」、というのであれば理屈があると思います。そういうところで『イソップ物語』も、良いものも悪いものもあるかもしれません。いずれにしても、面白おかしく物語仕立てにして、ただし善には良い結果、悪には悪い結果があると、きっちり織り込んで道徳をやったらよいのではないかと思います。

山田　私が聞きたいのは、国として、行政機関として文部科学省として、そういう特定の宗教にかかわることを題材にしていいのか、やるつもりがあるのかどうか、ということです。

藤本　「宗教に関わりません」というのは、政府が自分たちで勝手に縛りをかけているだけですから、いつでも取り外したければ取り外せるわけです。「心の成長のために、これからはこのようなものを取り上げます」と。「世間だけでは道徳を教えるのは無理なので、仕方がないから各宗教から一つずつ話を持ってきます」とか、やろうと思えばできるのですが、やりたくないだけなのでしょう。宗教なんかに口出ししてほしくないだろうと思います。

山田　今、憲法論議も盛んにされていますが、主に九条のほうですが、それは国防のことですよね。もう一つ、このような問題も同じぐらい重要だと思います。国が子どもたちの教育を、特定の宗教に基づく考え方でやれるか、やれないのか。やるとしたら、どのようなかたちでやるのか。これには憲法も関係してくる。そういうことに対する議論などは、今のところないと思いますがどうでしょうか。

藤本　まあ、無理です。正直なところ、まずかろうと思います。私の想像ですが、明治時代になって、外国と戦争しようというときに、仏教が言うような「業が自分に返ってくる」ということは、戦争したい人にとっては都合が悪いことなのです。だから、廃仏毀釈というようなものをやって仏教の影響力を削いだのではないか、とは思います。その後、仏教界も政府の主張に加担して戦争を黙認、さらには応援する論調になっていきましたし。

司会　林先生、先生が調査されたなかで、政府や宗教と道徳との関係はどうなっていますか。

林　では、タイの例でお話しします。タイのように、全人口の九割以上が仏教徒で、あらゆる官公庁の儀式も仏教一色のところでは、『ジャータカ』や「仏典教育」というものはあります。ですが、それは日本での「道徳教育」というかたちとは少し異なります。それは自分たちタイの仏教文化を勉強するもので、「道徳教育」とはいっていない点でしょうか。他方で、西欧でいうモラルつまり倫理や道徳という考えも入っています。

ご質問にあるような施策の実現についてはなかなか難しいところです。いま、日本国内で、ある特定の宗派が道徳教育をすると私立大学以外では問題が起こります。文部科学省のスタンスとしては、特定の宗派とは無関係に、中立的な立場でやらないといけないでしょう。

「道徳教育」を国が率先してやるのは、タイなどの事例を見て思うのは、ちょうど国や政府が「あるべきもの」として仏教を造るようなことと似ています。また、文脈は異なりますが、女性の出家を認めよ、というグローバルな声があがる一方で、「私は別に男に生まれ変わりたくない

わ」という女性もいるわけです。私が訪れたタイの村では、老若関係なく女性は自分が信奉する仏教を、女性を差別する仏教だとは語っていません。このように、道徳や宗教については、必ずといっていいほど、全く正反対の世界が同居するところがあります。「あるべきもの」「あるがままのもの」との違いといえばいいでしょうか。

偉い人が寄り集まってお上の膝元で「かくあるべし」「こうしなさい」と言ってしまった途端、タイの人たち、東南アジアの人たちはそれをまともには受けない、信用しないといいますか、そういう「健全」なところがあるように思います。いや、お上や偉いさんが言っているのだから、きちんとやるべく進んで学ぼうとする人は、教養程度が高いか、資産豊かな華僑系の人たち、あるいは中学・高校から英米に留学したような人たちで、おそらく西洋人と同じように、モラルは大事だと思っているのでしょう。しかし、モラルというのは宗教と同じで、自分たちの現実の暮らしのなかで培われていくもので、地域で展開されない限りあまり意味はないでしょう。

出家仏教は、在家者がいないと存在しないのと同じように、周りの環境があって初めて生まれるといった考えを持つ人は、学歴や教養知はなくても、しっかり自分たちのモラルをつくっています。タイなどではそういう局面が見られます。日本のように道徳がないから「道徳教育」をつくり、上から宗教色を脱色したかたちで導入するのは、東南アジアなどでは難しいのではないかと思います。

司会　小島先生、ミャンマーやパラウンの場合はどうですか。

小島　ミャンマーの場合は、政権によって仏教との距離の取り方が違いました。例えば、社会主義政権時代は仏教と距離を取りました。一方で、仏教を援助する政権もありました。

今でもよく見かけますが、ミャンマーの小学校では、朝、授業が始まる前に、「三帰依」「五戒」を唱えます。一通りお祈りが終わってから授業が始まる、というかたちでおこなわれています。先ほどお話ししたパラウンの場合は、仏教徒が大部分ですからいいのですが、ミャンマーの場合は、仏教徒は九割近くだといわれています。その他の少数民族にはクリスチャンもいますし、ムスリムもいます。それが無視できない数いると、その子どもたちに仏教を押しつけられるかという問題があるわけです。

実際に、ミャンマーではどうなっているかと言いますと、朝、小学生たちが、先生の先導の下、「三帰依」「五戒」を唱えている一方で、校庭を見ると、遊んでいる子どもたちがいるのです。「あの子たちは何をやっているのか」と聞いたら、「あの子たちはムスリムとクリスチャンだからやらなくていいのだ」と。要するに、放っておかれているわけです。

そのような状態ですが、それがいいのかどうかです。無理に信仰や仏教道徳を押しつけることもできないでしょうし、多宗教が共存する状況をつくり出すのは、なかなか難しいと、ミャンマーの場合は考えられます。

司会　タイの場合もそういうことはあるのでしょうか。仏教を国教としているわけではないわけですから。

林　タイのイスラム教徒は全人口の六～七パーセントですが、比率は増え続けています。憲法では明記されていませんが、タイでは仏教は事実上の国教なのでムスリム出身の人たちは、全国で行なわれている官公庁での仏式の入所式や学校での入学式などにいわば強制的に参加させられていました。しかし二〇一五年頃から、形式的にでもそうした仏式行事に出ない権利を言い始めています。

ただ、日本など海外メディアでよく報道されるのは、タイのなかでも南タイのほうです。皆さんがリゾート地としてご存じのプーケットなどの半島部のほうに、たくさんのイスラム教徒が集住しています。

伊東先生とはちょっと違うかもしれませんが、宗教というのは人間が、あの世のものとか、この世に存在しているものに対して祈ることだと考えます。ところが、現代世界でとりざたされている宗教は、「祈る」より「煽る」ものになっているようにみえます。

日常生活を両方ともうまくやっているのに、あることをきっかけに「あれはムスリムだから」「私は仏教徒だから」という語りが、ここ二〇年あまりのタイでは、増幅されているように思います。

先日フランスのニースで、トラックが突っ込んで八十六人が殺されるという事件がありました。あの事件では、すぐにＢＢＣや欧米経由で「トラック運転手はＩＳと接触していた」との情報が流れます。スマホに一回通信記録があったから「だからＩＳだ」という語り方にみるよう

に、宗教は「煽る」ために都合のよい名辞にしてメディアの便利な道具になっています。

メディアは情報をつくります。タイでもメディアの社会的影響力はおおきいです。私が申し上げたいのは、宗教はそういう形ではない隣人関係でつくられているところがある。そういう世界では、「ここで遊んでいるよ」「別に入っていなくても構わないよ」というように、それを許している環境が、すごく大事です。「こっちに来なさい」、「あなたたちはムスリムだから、これに出なくていい」という政策ができたとき、また、これは新しい他者をつくってしまう。このあたりをいい加減にやっているタイなどはむしろ上手なのかもしれません。

例えば、「タイ式民主主義」といいますが、タイでクーデターが起きると、「ほら見てみろ。いまだに成熟した民主主義じゃない」と判で押したように、日本や欧米のメディアは言うわけです。私はクーデターの渦中で、現場を何回も経験していますが、翌朝、戒厳令がしかれているクーデターの場所に行くと、屋台が出ていて、ご苦労さんと花輪を兵隊さんにあげている光景がある。今もタイは軍事政権です。しかし、それを「粉砕」すべき対象と主張するのは外部の人ばかりで、現地の人は異なる見方をもっています。

「いったい『〇〇新聞』は何を書いているのだ」という言い方ではなく、これだけ世界中の情報がたくさん飛び交っているといいながら、現実には二種類程度の情報しか届いていないように思います。

その意味では地域研究者の役割はかなり大事だと思っています。話が少し飛んだように見え

ますが、わたしが申し上げたいのは、「宗教」や「民族」をものさしにして、それぞれの少数派、多数派とラベリングしたところで、その内実は多様だという現実です。ですから、そこで「多数派ＶＳ少数者」に仕立ててしまうこと自体が、大きな政治の問題を生んでいる。ここにこそ、もう少ししっかりと理解の焦点を置かないと、限りなくＩＳ的なものや活動が増えていくと思います。

司会　今、お二人の先生が述べられたことですが、現在の国家は、いろいろな人によって成り立っています。そのなかには、いろいろな宗教を信仰している人がいるということです。そのうちのどれかの宗教に基づいたような道徳観や人生観などを、政府が取り上げることについて、やはり問題にされるのではないかというところがあると思います。

　では、だからといって、無色で中立のものがあるかといいますと、それはないわけです。政府が押しつけてくるのは、日本人、日本教といいますか、日本人としてのアイデンティティを持つための道徳や倫理、生き方ということで、いわばこれも一つの宗教のようなものだと考えてよいと思います。

　従いまして、それがいったいどのように作用し、いかなる結果をもたらすのかということは考えておかなければなりません。つまり私たちが幸せになり世の中が平和になるについて、政府が示す道徳や行事を受け入れるか否かというせめぎ合いが、これから特に熾烈になるのではないかという気がします。

日本教といえるようなものに抵抗していく知恵が、仏教や、その他いろいろな宗教のなかにあるのではないかという、本日のテーマはそういうところにもあります。

それでは、他の方。では、空井（うつい）先生、お願いします。

空井[4]　林先生に伺います。戒律の話を大変重く聞きました。今回の話のテーマである南方上座部仏教は、その戒律が国境を越えて共有されるものであるというトランスナショナル性を有しているが、その一方で、例えばタイならではの独自な宗教文化を成り立たせる側面があるのだなということを、大変興味深く伺いました。先生がたくさんスライドを用意されて、膨大な情報が瞬く間に通り過ぎていきましたが、その中に私としては若干引っかかることがあり、二点ほど質問したいことがあります。

一つは、南方上座部のベースとしての具足戒に対する、大乗のオリジナルであり、最澄が固執し続けた大乗菩薩戒のことです。配布いただきましたプリントでは三ページ目の左側の二段目に少し示されています。この日本の、いわばガラパゴス戒律について、お考えをおうかがいしたい。もし時間がありましたら、これは藤本先生にもおききしたいことでもあります。

それと、もう一つですが、先ほどの質問に対する回答のなかでも少し触れられたことですが、仏教の女性差別問題です。先生は「男に生まれ変わらなければ」というようなことをおっしゃり、プリントには九ページの真ん中の右側のところに「女性排除の上座仏教徒社会(?.)」とあります。スライドで見せていただいた最初の感動的な写真、女性も仏教のなかにしっかりと位置

を占め、在家としてそれを支えるという写真を見せていただいたので、このクエスチョンマークは、「そういうことではない」という話になると思ったのですが、先生のお話をうかがっていると、同じく最後の行に「涅槃に至るには男性の転生を前提」とあります。このようなことは上座部の所依である『パーリ仏典』のなかに出てきますか。

林　二番目のほうから説明します。この九ページの真ん中、右側のスライドで、クエスチョンマークが二つ入っています。「女性排除の上座仏教」を言い出したのは欧米の人類学者です。タイでもチュラーロンコン大学のスワンナー先生が、「ジャータカ」などを読み込んで、「ほら、これは明らかに男に生まれ変わらないと、女性は涅槃に至らないということを言っている」といった論考をだされたことがあります。仏説に、男尊女卑はしっかり書かれているから、上座仏教は駄目だという言説です。そのような言説がタイの知識人からも起こっているということです。

　このような言説が、日常の仏教徒の間ではどうなっているか。おばあさんや主婦たちがお寺へ行って、嬉々として戒を守りおこもりをしている。その場に男性の姿はまずない。フェミニストの人からはこてんぱんにされますが、現場での女性たちは異口同音にこう言います。「男は生涯に出家して大きな功徳を得るかもしれないけど、私らは毎日布施をやっている」と。例えは悪いですが、男は生涯にドカーンと一発花火を上げるが、自分たちは功徳を日々積んでいる、と。また二週間に一回は新月・満月の日にお寺にこもって五戒・八戒を守っていますと。功徳は、悪い行いと善行の結果を差し引きして生じると。男の人は、パッと五戒を受けた、翌日にはもう

酒を飲んでいると。これは、これでいいのです。それが戒律のあり方です。駄目でも一度は守ろうとするのはいいわけです。ですが、女の人はそういうことが少ない。つまりは、男と女は等しく功徳を得ているという見立てがあるわけです。

村での日々の実践を見ていると、明らかに女性が主導しているという印象が強いのです。しかし、その先生などの語りや論文とか、ご本人の話を聞くと、「いやいや、仏説にこう書いてあるから駄目なのだ」ということを言う研究もあるということです。

空井　先生のご認識としては、『パーリ仏典』のなかに経証として、「涅槃に至るには女性の転生を前提とする」ということがあるのですか、ないのですか。

林　僕のなかではあります。書いてあります。

空井　例えば、どの経典ですか。

林　何だったかな、ジャータカ以外にもありましたね。

空井　仏陀にはなれない、帝釈天にはなれない、転輪聖王にはなれないということはありますが、例えば、『テーリーガータ』のような経典のなかに、涅槃に至ったという尼僧がいくらでもいるわけです。つまり、女性でも悟ることはできます。当然、涅槃に至ることもできます。阿羅漢果を得ることもできます。ただし、仏陀にはなれない。このへんのところは、藤本先生のご専門なのですが。

林　私がこれを引用しているのは、先のタイの先生の論文です。原典からのものではないです

よ、という前提でのお話です。

何度も言いますが、「女性排除の上座仏教徒社会だ」という言い方、そういう言説がタイで生まれているということで紹介しているわけです。

空井　最初、そのように理解したのですが、「涅槃に至るには男性の転生を前提」についてはクエスチョンマークが付いていないので。

林　クエスチョンマークを付けます。

空井　お願いします。

林　いわゆる涅槃に至る、仏陀になる、ならないというのは、同じ国の人たちの仏教徒の間で違う語りが生まれていますよ、とお伝えしたいのです。このような言説が、今、日本人の社会のなかに、アカデミックな学会もそうですが、それが主流ですというかたちで、研究者の間で出来上がってしまいつつある、そのことを言いたかったのです。

だけど、現実には男と女は一緒、「自分のほうが功徳も多いなんて思っていないよ、一緒だよ」などと言ってしまうと「女性へのエンパワーメントを削ぐではないか」と言われた私の実際の経験もあって、こうした揺らぎがしょうじています。

それから、もう一つ、大乗菩薩戒、最澄、ガラパゴスですが。最澄のことは、戒壇を設けるということの意味に関するものです。

最古の戒壇が東大寺に設けられていたように、戒のいわゆる授受のシステムは、日本もあった

と思います。ただ、問題は、その戒をどう捉えるのか、どう理解するのかについては、おそらく真言宗のあたりでは、今もその考えを持っている人に会うことがありますが、戒というのは食べ物と同じだと。自分の体のなかに入れて育てていくものなのだと。すなわち、養っていくものだと。

だから、現代のタイでは、一五年、具足戒を守っている人がいて、初めて新しい新参僧にそれを与えることができるのは、まさに、その人が一五年間、自分の体のなかに戒を育ててきたという認識です。ですから、戒を受けるためには、誰か持っている人を呼んで来ないと駄目なわけです。

カンボジアでは、ポル・ポトが仏教を全て放逐しました。そのときに、私の調査では、いったん私度僧が二千人ぐらい出て、得度式を復興させるのですが、「それは無効。正しくない」ということになり、南ベトナムに住んでいるカンボジア人の上座仏教僧を招いて、そのときは七人以上でしたが、もう一度、戒を与える。

これは、スリランカから綿々と続いてきたパターンがここにあるという確証です。私がそこで感じたのは、戒というのは本や書物、制度ではないということです。まさに生きている人間、実践している人間がいるからこそ意味があるわけです。上座仏教徒の世界では、そのような意味があるという点で、それは最澄の戒壇とは全く違うのではなかろうかということです。

藤本　少し補足させていただきます。戒に二種類ありまして、出家の場合は戒とはそのまま法

律で、これを守るのが義務になっているのですが、在家の場合は自分で誓う、自誓の戒というものです。ですから、在家信者は「五戒を守ります」と自分で勝手に誓っていて、お坊さんは、それを「うん。君、頑張っているね」と言うもので、「わしが見張っているぞ。おまえ、酒、飲むなよ」というものではありません。すぐに破戒して酒でも飲んで、翌日、「では今日からまた五戒を守ります」と平気で言える世界なのです。

出家したら、出家している間は法律を守らなければならないから、見張られながら頑張るのです。在家で頑張るのであれば、五戒だろうが、八斎戒だろうが、十戒だろうが、もっとたくさんでもいいわけです。自分で頑張って、頑張った分だけは何がしかプラスになったから、徳も積めたと考える。修行のためにもなるということで、私はそれでいいではないかという気持ちでいます。

日本の天台宗であれ、真言宗であれ、上座仏教の比丘戒（具足戒）から見れば、自誓戒です。自分たちで勝手に戒律を五十種類ぐらいつくる、あるいは選び出しておいて、「われわれは、これを守りましょう」ときちんと授けているけれども、上座仏教の基準からいえば、正式な具足戒ではないから、大乗のいろいろな戒は自分たちで頑張っている自誓戒ということです。

自誓戒が具足戒より劣るということではありません。出家でも在家でも、生活スタイルの違いがあるだけで、徳を積むことや悟りに至ることさえ、どちらのスタイルでもできます。在家で戒律を頑張っている人たちは、やはり徳は高いです。とはいっても「おまえは戒律を守っていな

いから駄目だ。俺はすごい」などというのは慢心があるから、その分、悪業にもなるし、複雑なものです。人のおこないを見るよりは、自分は自分でしっかりやりましょうということです。比丘の戒はとにかく法律です。在家の場合は、五個だろうと、十個だろうと、大乗の五十個だろうと、自分でしっかり頑張りなさい、ということです。

ただ、それを真言宗は真言宗で、天台宗は天台宗で制度にしていますから、その宗派のなかでは、それが取りあえず規範になっています。ですから、自分たちで頑張るべきだとは思います。

司会　では、下野先生お待たせしました。

下野　私どもは哲学などという学問をやっておりますので、今日のお話を伺っておりますと、ついつい理念的なことを考えてしまいます。まず「南伝上座仏教と現代」というテーマがあって、日本仏教との対比で「南伝上座仏教」ということが語り出されました。

伊東先生の基調報告においては、南伝上座仏教というものが一つの普遍性を持った、一つの実体であるかのように語られていました。林先生のお話を伺い、それから小島先生のお話を伺うちに、タイはタイで緩やかな多様性のなかに、また生きられるかたちで、さまざまな経験的な運用知が作動しながら、緩やかな統一と多様性が担保されているという事態が紹介されていると理解しました。

また、小島先生のお話になると、ナショナリティとまでは申しませんが、エスニシティが、南伝上座仏教なる統一的・普遍的事態を、(伊東先生のお言葉を借りれば)食い破っていく姿が示され

たと思います。

そうしますと、南伝上座仏教は、果たして実在するのかという疑問が成立するわけです。それは何か理念型として存在するのでしょうか。それとも、これらの事態を一貫して何事かがそこに実在するのでしょうか。このあたりのことを先生方はどのように考えておられるのでしょうか。

伊東　では、まず私から。一つの形があるかどうかということですが、最初に申しましたのは、大ざっぱに言ってですが、前近代においては、林先生の報告のなかにもあったと思いますが、スリランカでの上座仏教が駄目になったら、タイからテコ入れが行われる、それから、またビルマからもやってくる、そういう交流があった。つまり、スリランカ仏教やビルマ仏教とか、そういうものがなく、あったのはテーラワーダという一つのものしかなかったと思います。

しかし、それが近代になってくると、林先生や小島先生がお話しになったように、このあたりが、私とは違うところかもしれませんが、ネイションを形成する文化に食い破られてタイ仏教とかパラウン仏教というものが成立してくる。これが本日のテーマの根底にある認識です。

もう一つ、「南伝上座仏教というのはあるのか」というのは、これは経典として、きちんと一つのものとしてあって、同じテキストとして共有されている。ビルマの経典とタイの経典は違うかといえば、これは同一だと思います。パラウンの経典も例外ではありません。しかし、それが実践されていく過程で、いろいろな偏差が生じ、民族語による仏典も生み出されていく。近代と

前近代では、この点が異なると、私は考えております。

藤本　まず理念を申しますと、先ほどの続きでもあるのですが、例えば二二七項目の比丘戒は変わっていないはずです。一部、変わったという学者もいますが、変わったという証拠はない。「戒律はこうだ」と最初から定まっていて、戒律を破ったときの罰則も変わっていない。不変なのですが、それと別に、現実のお坊さんは結構いい加減な場合もあって、戒律を破ったり過ちを犯したりする比丘もいますが、それは戒律で罰を授けて、それで許すわけです。罰則規定も最初から定まっています。

四つの波羅夷罪、性行為をしたり、人を殺したりすれば還俗させますが、他の戒律を破っても、謹慎などの罰則を受けたら許し、元どおりの比丘としての権利が戻ってくるのです。最初から完全な人ばかりではありませんから、破戒したり失敗したりしても次から頑張るように育てるための戒ですから、そういう仕組みになっているのです。この点でも比丘の戒律は法律と同じで、謹慎期間などの罰則を満了したら、またやり直しできるのです。

不完全な比丘が完全な悟りにまで成長していくための戒律ですから、不完全な者がいて破戒したり何か失敗したりするのは当たり前なのです。そういう比丘の不完全さをも矯正できるようにきちんと定められている。戒律そのものは絶対に変えないぞと頑張っているわけです。

現実のお坊さんたちは、いい加減な人もいますから、あるいは地域のこともいろいろあって変わっているのだろうと思います。それが理念から見た戒律です。

林　ほぼ同意見です。パーリ戒があって、例えば、それは五つの戒律のなかで飲酒をしないというのがありましたが、タイでは二〇〇二年にできた国家仏教庁が拡張解釈して、麻薬などの中毒性のあるものは取らないというような新しい解釈を増やしました。現代の社会状況に合わせて、そのような読み解き方をするのですが、パーリの言葉は同じです。パーリ戒としては同じなのです。

上座仏教の思想の原点をつくったといわれるのが、紀元五世紀初頭に南インドからスリランカに来たブッダゴーサ（Buddhaghosa）という仏教研究者です。その人が「まさしく戒は仏教の齢（よわい）である」と記しています。戒とは仏教の「年齢」ですと。現実に戒があるから、パーリ戒があるから南伝上座仏教がある。そのことが一つです。

もう一つは、パーリ経典について、日本人が思うような基準とは別の違いがあることです。例えば、カンボジアの人は、タイのお坊さんが読むパーリ経を聞いて、「発音が変だ」と言って笑う。逆に、タイの人はカンボジアのお経を聞いて、「田舎者が……」などとかげでいうのですが、どちらも同じパーリ戒です。

その音の違いで、パラウンもそうですが、いろいろな教派が出てきます。その違いはお互いをバッシングするようなものではありません。ただ、自分が一番正しい、自分たちの詠み方が一番美しいと思っているだけです。

このパーリ戒、パーリ経典の言葉を変えないというのでしょうか、『パーリ経典』を勉強する人

は、初めは意味が分かりません。「意味が分からないものを、なぜ勉強しているのだ」と聞くと、「最初は、それでいいのだ」と答えます。

考えてみましょう。私たちが初めて洋楽を聴いたときに、意味は分かりましたか。それと同じです。とにかく頭の中に入れて、このような場で使うお経であることを教えられていくわけです。逐語訳は後でついてくるわけです。

ボブ・ディランがノーベル賞をもらいましたが、初めて彼の曲を聴いたとき、意味が分かりましたか。だみ声で「ライク・ア・ローリング・ストーン（Like a rolling stone）」と言っているな、という程度で、大人になってから意味が分かった。譬えていえばそういう印象です。

ですから、パーリの言葉は変えない。それを読み続けること、「法語（ほうご）」を変えない言葉として持続してきた点では、上座仏教のアイデンティティの、その二番目の大きなポイントだと思います。まず音としての言葉です。そして、意味は後から来ます。ですから、上座仏教は存在します。

下野　「存在します」と断定してくださったので、「そうなのでしょう」と私も理解するわけです。その際、ウィトゲンシュタイン的な家族的類似性においてあるのかなと思ったりもするわけですが、やはり、その本体は戒であり、経典なり、戒なりを読むときの言語であるという実体論的な理解とは違うのですか。

林　もちろんそうです。しかし、それをやっている人がいるということです。申し上げたいの

は、仏典のなかではなく、それを実践する人間が存在していることに、南伝仏教の意味があるということです。その人がいなかったら、終わってしまう。ですから、スリランカは戒統が切れた。実践する人がいて初めて存在している。それが実践理念という空虚なプラクティスではなく、人がいてやっているということ、これが綿々と続いている。違う言葉、発音でも同じことです。これが南伝仏教のアイデンティティと思います。

おそらく、現地の人たちもそう思っているわけです。ですから、かれらにとって日本の仏教は、仏教でありません。戒を日々実践する僧侶がいないのですから。私は浄土真宗のお坊さんを、何回もタイのお寺へ連れていっています。「日本のお坊さんを連れてきたよ」という経験が何回もあります。そうすると、「おまえ、なんでTシャツを着ているの」と言うわけです。「なんで頭を剃っていないの」と、「いや、子どももいるのですよ」と言うと、「どこに戒律があるのか、戒があるのか」と聞くわけです。「戒は心の構え。頭の中にある」言っても分かりません。彼らにとって戒は理念ではないのです。自分に鋳込まれて縛られて、失敗したら二週間に一回、「ああ、これを間違えました。また立って小便してしまいました」とか言うわけです。二二七戒のあらためが二週間に一回あるわけです。

下野　続けてもいいでしょうか。もし他にご質問があれば、譲りますけれども。

司会　では、他に何かございませんか。では、下野先生、お続け下さい。

下野　何か絡んでしまうようで申し訳ありませんが、おっしゃっていることはすごくよく分か

りますし、個人的には、その考え方に同意します。ただ一方で、戒は自誓戒だし、その自誓戒ですら守っていないかもしれないのが日本の仏教であるわけです。一応、「連綿伝持の法統」などと言ったりしていますし、確かに「法流血脈」を見ていると、繋がっているようには見えると思います。そのへんは南伝仏教側からは評価されないのでしょうか。

藤本　それなりに繋がっているからよろしいのではないでしょうか。南伝上座仏教のほうは長さだけ言えば、釈尊以来二六〇〇年、頑張っていますと。天台宗であれば、日本の天台で言いますと、一〇〇〇年、一一〇〇年以上続いていますから、そちらはそちらで頑張っていますねということはあります。戒を守る目的は、それによって身口意のおこないを謹んで心の中をいかに清めるか、心の中を汚さずにいるかという問題ですから、自分たちが勝手につくった戒律であっても、世間的に見てまともなものであれば、やっている分だけ成長していくわけです。その師匠が弟子に「これは守りなさい」と授けたら、その弟子もまた続いていくわけです。結構、頑張れば法統が続きますね。

　その地域のお坊さんが皆殺しされたとか、お坊さんが何代か続けて堕落し続けると、法統が一度途絶えたりはします。スリランカの上座仏教の場合、こちらが駄目なら向こうから持ってくるという感じでタイのお坊さんの協力を得て比丘サンガの戒統を逆輸入しました。キャンドルサービスでロウソクの火をこっちからあっちに、あっちからこっちに移すようなもので、こちらに法の灯がなくても有為な人材さえいれば、別の火床から法の灯を継ぐことはできるのです。

上座仏教はそうやって、国さえ跨って必死に法統を守って頑張ってきたわけです。

今のところ天台宗も続いていますから、頑張っています。危ないことも何回かありましたが。開祖の後、いきなり人気が盛り下がったり、信長に攻撃されたりしましたが、続いていますから。戒はもともとある戒の中から自分ができそうなものだけでも選んで、「がんばった分だけよかった」というぐらいのプラス思考でいいのではないでしょうか。もともとだらしない自分が、仏教に出会って、戒に出会って、では、これだけでも守ってみよう、禁酒でも半年続いたぞ、とか。やらないよりははるかに大きな力になっているはずです。

林　評価するかしないかということですが、タイの事例で申しますと、先ほど、上座仏教のお坊さんに日本の僧侶を連れていって、「戒は心構え」という説明を知って、タイのお坊さんは「へえ」とか言って、「うらやましいな。子どももできるのか」とか言うわけです。大事な点は、それで日本の仏教が仏教として駄目だとは言いません。つまり、逆の認識です。別物だと。何度でもいいますが、僧侶ではないが、熱心な在俗篤信家とみられるのです。

最近タイの比丘から聞いた言葉ですが、「上座仏教のお坊さんは、到達点に向かって真っすぐの道を急斜面で行くと。たぶん、日本のお坊さんは、いろいろなことをやりながら、しかし、行くところは一緒だ」という説明をもらいました。安心したと言ったら変ですが、そういう評価をされているのだなということを知りました。

戒はないということは知っています。ただ、やり方が違うだけだと。そういうことは、これは

大学の偉い先生が言っているのではなく、普通のお坊さんが言っているのです。ですから、日本の仏教が駄目だと思っているのは私たちだけです。向こうの人はそういう評価の尺度を共有していません。

司会　他にございませんか。どうぞ。

小野[5]　私は素人ですので、西洋史のほうから基本的な質問を、それぞれの先生に一つずつ、比較ということでさせていただきたいと思います。

まず、藤本先生がおっしゃったことで、「仏教学」というのは、何か「暇人の遊び」のように思えてきましたが、これを先生は人文科学のなかに、入れていらっしゃるようです。西洋のキリスト教の場合は、これに対応するものとして神学があります。これは「暇人の遊び」ではなく、敵であるところの異民族や異端を説き伏せるための学問であり、そしてこの神学が大学をつくりました。それが出発点です。私もバチカンのほうに行って見てきたことですが、彼らは今でも説教を学問としてやっています。

例えば、日本に派遣されるイタリア人がいたとすれば、彼は日本語を覚えて、相手を折伏させるためのトレーニングを、学問としてやるのです。もちろん、問答集もあります。本気でこのようなことをやっているのですが、その神学にあたるものが仏教学にあるのだろうかと。それを一つ、藤本先生にお尋ねさせていただきたいと思います。

次に林先生におうかがいしたいのは、「功徳」に関してですが、これも驚いたのですが、例え

ば、生まれ変わってきたときに、もしかしたら、アリになってしまうかもしれない。いくら功徳を積んでも、自分はカエルやアリになってしまうかもしれないという恐れは抱かないものなのでしょうか。

これはプロテスタントが、プロテストした理由に関係します。自由意志をめぐる有名な論争がありますが、いくら神に祈ってもアリに生まれるかもしれないとプロテスタントは考えました。このような恐れを、彼らはまったく抱かないのかという、単純な疑問です。

最後に小島先生にお伺いしたいのは、普通、西洋で「宗教」といいますと、「叙任権闘争」や「カノッサの屈辱」というような、制度との対立。皇帝が何を言っても、宗教で団結してしまい、国家を超えて戦う。皇帝があやまるまで許さない、国家権力は認めないということが、ヨーロッパの宗教の成り立ちです。神学もそれに関わる学問として発展してきたわけです。

それに対して、先生のお話ですと仏教がネイションをつくるために利用されたというような感じですが、このようなことは、ちょっと理解がなかなかできなくて、ネイションという理解でいいのか。要するに仏教によってナショナリズムができたという理解でいいのかどうかということです。それぞれにお願いいたします。

司会　仏教によってナショナリズムができるなど、誰も考えていないと思いますが。それでは先生方、いかがでしょうか。

藤本　たいへん重要なご指摘です。仏教(学)の中でキリスト教の神学にあたるものは、むしろ、

江戸時代の各宗派の「宗学」でした。このことは私のご報告から抜けていました。江戸時代の宗学は、自分の宗派が一番だという気分でやっていて、それも含めて明治時代になって仏教が全部否定されて、特に大学をつくるときに「そんな各宗派の実践みたいな調子でやるのであれば、帝国大学で仏教はやらせません」ということで、骨抜きにされたのです。

西洋で一八三〇年代に始まって、明治の日本に伝わった「仏教学」というのは、キリスト教や西洋の大学の流れで見れば、神学ではなく聖書解釈学のほうです。一八三〇年頃からだと思いますが、四つの福音書の比較研究が始まって、共通するトピックと単独のトピックを仕分けして、「四福音書の源テキストQ sourceは何か」などと宗教文献を文献学として研究し始めた、あのあたりです。聖書を、神学としてではなく単なるテキストとして解剖してやろうという新しい研究法です。

そういう時代に仏教の文献もチベット語、サンスクリット、漢文、少し遅れてパーリ語のものが、ほぼ同時に西洋世界に大量にもたらされたものですから、「仏教学」といえば西洋では最初から「仏教文献学」として始まったのです。それがそのまま明治の日本に入ってきたということです。

林　私はどう答えたらいいのか分からないのですが、功徳をこれだけ積んでいるのに、来世でアリに生まれたら心配で心配で眠れない、という人に出会ったことはありません。

むしろ、写真をお見せしましたが、一生懸命に功徳を水で転送していました。あのおばあさん

に、「それは誰にむけてやっているの」と、功徳を転送している相手を聞くと、「亡くなったお母さん、お父さん」と言う。「もうとっくに転生しているよ」と、私がふっかけます。そうすると、「いいんだ」と。「余った功徳は、身寄りのない霊へどんどん行く」と。まさに施餓鬼です。

功徳は目には見えません。どれだけ自分が積んだかもわかりません。そして、それがどれほどあれば極楽に行くかも見えません。「ずっと、こうやって功徳を積めることが幸せ」と言うわけです。死ぬまで積むのです。そこに圧迫感というか、恐れというか、免罪符的なものはないということです。

それから、マックス・ウェーバー(Max Weber)の受け売りですが、イスラム教徒に出合ってキリスト教神学が生まれています。トマス・アクィナス(Thomas Aquinas)が『神学大全』をつくった経緯と同じようなことがタイでもあります。ラーマ四世(モンクット王)はフランスからタイに布教にきていたカトリック神父パルゴアと会い、ラテン語を教えてもらいます。そして、彼はパルゴアにパーリ語を教えます。そんな交流があって、のちの「タイ仏教」の背骨となるタマユット派を制度化していき、近代的なタイ仏教、今のタイのかたちをつくるわけです。ただ私の論点はそこにではなく、それとは別の広いすそ野をもつ仏教があるということです。

小島　ミャンマーにおける政治権力と仏教の関係ですが、これはもろ刃の剣とも言えます。政権が自らの支配の正当化として、サンガに対して布施をおこなうわけです。布施をおこなうことによって、われわれは正しい仏教徒だと主張したい。ですから、特定の僧侶に対して寄進をお

こない、その様子をマスコミなどに流していくわけです。軍政幹部が高僧に対してお布施をしていく様子をテレビや新聞で流すといったことが、軍事政権時代は特に頻繁におこなわれていたと思います。

ただ、それに危険な側面があるのは、僧侶も常に政治権力者の言い分を聞いているかということです。一九九〇年にも僧侶による反政府デモが起きていますし、さらに、二〇〇七年にも起こりました。ミャンマーの場合、熱心な仏教徒の多い国ですから、僧侶が反政府側につくと、お布施を受け取らないというかたちのデモをやるわけです。デモは、「(托)鉢をひっくり返す」と表現されます。先ほど林先生の写真にあったと思いますが、僧侶は毎日のように在家信徒にお布施をしてもらうわけです。「鉢をひっくり返す」ということは、あなたたちの寄進は受けませんというかたちでデモをするわけです。

そうすると、反政府側の正当化に繋がってしまうということで、政権は僧侶を暴力的に逮捕して、強制的に還俗させて、監獄に入れるというかたちで対処しています。

それに対して反政府側は、隠し撮りの映像で、そういった場面を見せていくのですが、政府は偽僧侶だというわけです。簡単に言いますと、出家は誰でもできるわけですから、偽僧侶が僧侶のかたちを取って、僧侶をあおって反政府的な活動をしているという理屈をつけるわけです。だから、取り締まったのだといって正当化していくという状況が起こります。

ですから、常に仏教がネイションに利用されているわけではなく、僧侶の側のアンチ政府活動

などというのも、ミャンマーでは時々、おこなわれているわけです。一方で、僧侶の側にも政治と距離を取るべきだという考え方もあるのですが、やはり、そういった活動に関わる僧侶もいて、それは政府にとってかなり敏感な対象になっているということです。

司会　議論が深まりつつあるところですが、予定の時間をかなり過ぎましたので、このへんでお開きにしたいと思います。三人の先生、どうもありがとうございました。会場の皆さんも遅くまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

註

1　総合討論の場で、質問者が名乗られなかったので、仮名とした。

2　下野正俊　愛知大学人文社会学研究所所員、文学部・教授

3　総合討論の場で、質問者が名乗られなかったので、仮名とした。

4　空井伸一　愛知大学人文社会学研究所所員、文学部・准教授

5　小野賢一　愛知大学人文社会学研究所所員、文学部・准教授